

日本ホリスティック教育/ケア学会 第5回研究大会(2022年度)

要旨集

大会シンポジウムテーマ:

教育とケアのあわい — 教育・保育・心理・看護の根底にあるもの —

- 日時: 2022年6月25日(土)13:30~16:40(入室開始 13:20)
2022年6月26日(日) 9:00~16:00(入室開始 8:50)
- 開催方法:オンライン開催(開催校:帝京大学)
- 大会長:青木 芳恵(帝京大学)

■ スケジュール

第一日目 6月25日(土)

- 13:20 入室開始
- 13:30～15:00 ラウンドテーブル1
- 15:10～16:40 ラウンドテーブル2
- 16:40～17:10 頃 交流会

第二日目 6月26日(日)

- 8:50 入室開始
- 9:00～9:30 定例総会
- 9:45～11:45 研究発表(全体討議含む) 分科会1・分科会2
- 13:00～16:00 シンポジウム

■ プログラム

事前配信

基調講演「教育とケアのあわい」 汐見稔幸(東京大学名誉教授 前日本保育学会会長)

6月25日(土) ラウンドテーブル

	時間	発表者	発表タイトル
1	13:30～15:00	神谷 良恵 曾我 幸代 工藤 由恵 佐貫 仁美	「担当制・流れる日課」の見直しから生まれる保育実践の報告—本当に「子どもを大切にすると」はどのようなことか—
2	15:10～16:40	吉田 敦彦	〈ホリスティック教育/ケア〉研究の存在意義をめぐって

6月26日(日)

研究発表 分科会1 司会:山西優二・曾我幸代

	時間	発表者	発表タイトル
1	9:45～10:10	伊東 久実	日本語習得のための発話を重視した読み聞かせ会の実践—アクティビティを中心に—
2	10:15～10:40	菊地 恵美子	学校教育における「社会情動的スキル」涵養—深い次元でのリフレクションを促すホリスティックアプローチの教育実践—
3	10:45～11:10	赤谷 昌美	対話におけるスピリチュアルケア—臨床スピリチュアルケア実践者養成の体験をふまえて—
	11:15～11:45	全体討議	

研究発表 分科会 2 司会:金田卓也・池田華子

	時間	発表者	発表タイトル
1	9:45～10:10	山下 恭平 井藤 元 森 彩花	シュタイナー音楽療法における聴き手の脳波測定
2	10:15～10:40	佐藤 牧子	幼児と小学校の参加する持続可能な社会を目指す アートワークショップ
3	10:45～11:10	坂東 光有	坂東流日本舞踊の「稽古」におけるホリスティックな 学び—七代目坂東三津五郎から八代目への芸の 継承を手がかりに—
	11:15～11:45	全体討議	

シンポジウム 司会:成田喜一郎・守屋治代

時間	報告者	
13:00～14:45	木戸 啓絵 青木 芳恵 住田 昌治 坂井 祐円	テーマ:教育とケアのあわい～教育・保育・心理・看護の 根底にあるもの～ 各報告者 20 分
14:45～16:00		報告者による討議・質疑応答・全体討議

【ラウンドテーブル 1】

「担当制・流れる日課」の見直しから生まれる保育実践の報告 —本当に「子どもを大切にすると」はどのようなことか—

企画・発表者：神谷 良恵(同朋大学)、司会者：曾我 幸代(名古屋市立大学)
実践報告者：工藤 由恵・佐貫 仁美(とくしげ太陽保育園)

1. 研究の背景と目的

近年、乳児保育の普及に伴って、乳児保育の質が問われるようになった。保育における乳児とは 0 歳児クラスから 2 歳児クラスを指す。

生まれてからわずか 3 年程度の乳児は、身体の成長、生理機能、運動機能、言語、認識の発達、コミュニケーション能力等において個人差が大きい。しかし、待機児童の解消に伴い集団で過ごすことが多くなり、その過ごし方は同じ時間に全員が同じ活動することが優先される「一斉保育」が一般的である。

保育所保育指針(厚生労働省、2017)では、3 歳未満児までの保育においては、「愛情豊かに、応答的に」関わる必要があることが述べられており、「一人一人」の発育、状態、気持ち等に合わせた適切な援助が求められている。しかし、時間で区切られる「一斉保育」においては、一人一人に合わせて応答することは難しい。そのため、近年「子どもを大切にすると」保育方法として「担当制・流れる日課」が注目され、実践園が増加しているが、疑問や葛藤もある。

本ラウンドテーブルでは、「担当制・流れる日課」の実践園での事例を報告し、意見交換する中で、実践園の理念である「子どもを大切にすると」ことを保育の中でどのように実現しようのかを再確認する。そして、明日からの保育の更なるヒントを見出したい。その際、「生活の場」(厚生労働省、2017)である室内の「環境」と子どもの一日の過ごし方である「日課」に注目する。

2. 担当制・流れる日課の意味

「担当制」とは、一人一人の子どもが 0 歳から 3 歳未満児クラスに所属する間「特定の大人」と生命の保持と情緒の安定に関してケアを通して個人的に関わることを保証するものである。また、「流れる日課」とは、一人一人の子どもの「食べること」、「寝ること」、「遊ぶこと」などに必要な時間を十分に保証できるようにクラス全体の一日の進行を考えるシステムである。これにより、一人一人の子どもは、集団の中でも担当の保育者と生活の仕方を覚えていくことや十分に遊ぶことができる。

3. 研究方法

(1)実践園：とくしげ太陽保育園

(2)研究期間：2021 年 4 月-2022 年 5 月

(3)方法：①保育観察②「担当制・流れる日課」についての学習会③保育の見直しによる環境と日課の再構成④実践報告と情報交換の 4 つの方法を適宜繰り返した。本研究は、保育の見直しについての相談から始まった。「担当制・流れる日課」を実践しても「子どもを大切にしている」と実感できない疑問と葛藤があったため、1 歳児クラスと 2 歳児クラスの環境づくりと日課を見直した。方法論ではなく目の前の「子どもを大切にすると」ことから新たに出発したことが、保育園での子どもの暮らし方やあそびなどどのような影響があったかについて報告する。また、保育者の試行錯誤、沸き起こる疑問や葛藤、保育者としての喜び等にも焦点をあてることで、同じ空間・時間を過ごす人としての相互関係に着目する。

【ラウンドテーブル 2】

〈ホリスティック教育/ケア〉研究の存在意義をめぐって

吉田 敦彦(大阪公立大学)

発表者は、研究代表者である科研費共同研究(基盤 C)「オルタナティブ教育の新展開を踏まえた「ホリスティック教育/ケア」の原理的研究」(2020～2023 年度)に取り組んでいる。中間点である 2021 年度末(2022 年 3 月)には、成果の一端として単著『教育のオルタナティブ／〈ホリスティック教育/ケア〉研究のために』(せせらぎ出版)を公刊した。同書、とくに結章「〈ホリスティック教育/ケア〉研究のために」を共有し、参加者から感想や意見をもらって、本学会の研究の意義や可能性についてあらためて話し合ってみたい。

その際、日本教育学会の英文機関誌 *Educational Studies in Japan (ESJ)* が、本年度論文募集の特集テーマを”Rethinking Boundaries: Dilemmas and Potentials”と定めた趣旨説明文も参考にしたい。近代社会が構築してきた枠組み、既存の様々な境界(教育／福祉・ケア、子ども／大人、公／私など)を問い直す実践的・理論的な試みを募集しており、本研究と深く呼応する課題意識を述べているからである。たとえば、社会的な分断が深刻化する一方で、標準化が急激に進行しつつある今日における「連帯」のあり方や「全体性」の捉え方、Caring や Counseling を超えた Welfare や Wellbeing としての福祉との融合や協働への取り組み、教育領域への多様なアクター(NPO/NGO、民間塾、カウンセラーや地域住民など)の参入をめぐる課題が例示されている。

こういった現代日本の教育/ケアをめぐる課題意識に〈ホリスティック教育/ケア〉研究がどのように応答していくことになるのか、触発的な意見交換ができれば幸いだと考えている。

日本語習得のための発話を重視した読み聞かせ会の実践
—アクティビティを中心に—

伊東 久実(身延山大学)

本発表では、日本に在住し日本語支援を必要とする海外にルーツを持つ児童の日本語能力を維持・向上させるために、児童の活発なアウトプット活動を盛り込んだ読み聞かせ会のプログラム内容の検討を行う。読み聞かせ会は、教育的資源を有する各地域の公立図書館で行うことを想定している。

このプログラムについて、2021年度はストーリー・テリング(児童が大人に読んだ本の内容を語る活動)の有効性を検討した。今年度は、プログラムのもう一つの活動であるアクティビティ(絵本の内容に関連した「作る」、「話す」活動の総称)の意義と効果について、「粹付け交渉」(教師が予め用意している答えを確認するための交渉)ではない談話が成立するかどうかを確認した。McCarthy(1995)は、その成立が言語習得において重要性だと指摘する。具体的には、「丁寧な交換を可能にする5つの方法」と「丁寧な交換時に見られる発話の特徴」を分析する基準を設定し、それらの出現を確認した。

その結果、「丁寧な交換を可能にする5つの方法」〔①最小の脈絡を作る、②正確さや流暢さではなく話の内容を評価する、③相手の発話を助けることに気遣いながら自然な会話の交換を行う、④いつ、どんなことを話すかの規制を緩やかにする、⑤会話の中に相互性を確保する仕組みを用意する〕が確認された。また、「丁寧な交換時に見られる発話の特徴」の4項〔①事柄の背景の説明、②相手の言いたいことを予測して完結させる、③返事を確認する(同意や反意など)、④追跡(相手の言った内容を深めるための質問や応答)〕のほとんどが確認された。

こうした丁寧な交換を可能にさせた理由は、絵本を活用したアクティビティは、①読み聞かせの絵本から発展させる活動であるので、アウトプット活動の場面設定や文脈化、さらに児童が互いに共通点や相違点を見つけることが容易である、②絵本に関連させて自由な発想でアウトプットを促進させる創作活動であるため、大人は創作内容に関する児童の発話を助けることに重点を置き、言葉の正確さを過度に指摘しないため、と考えられる。

今回の実践ではさらに、大人の質問—児童の解答のパターンとは異なり、児童が発話を始動したり、大人と児童の双方が互いに同意や反意を示したり発話の内容を深めるための質問や応答を行ったりした。これは、McCarthy が言語習得上重要と指摘する「お互いが始動したり、応答したり、追跡したりする権利を持ち、時にはお互いに情報を伝えあったり、確認し合う」行為である。

なお、本研究はJSPS 科研費 JP20K00711 の助成を受けたものである。

学校教育における「社会情動的スキル」涵養
—深い次元でのリフレクションを促すホリスティックアプローチの教育実践—

菊地 恵美子(仙台育英学園高等学校・秀光中学校)

1. 社会情動的スキル

これまで教育現場でカリキュラムの主要な部分を占めて来た知識を積み上げ、読み書きでその到達度を図るという IQ(認知的スキル)に加えて 21 世紀に必要なスキルとして「社会情動的スキル」(Skills for Social Progress)(EQ:非認知スキル)が注目されている。社会情動的スキルが認知的スキルとともに、子供が人生において社会的に成功するために重要な役割を果たすことが指摘(Heckman 2006)され、経済協力開発機構(以下 OECD)加盟国9カ国で行われた調査分析によると、子どもたちの認知スキルレベル(読み書き能力、学習到達度テスト、成績などで測定可能)を上げることは、高等教育への進学率と労働市場での結果に強い影響を及ぼし、社会情動スキルのレベル(忍耐、自己肯定感、社交性など)を上げることは、健康に関する成果と主観的幸福感(ウェルビーイング)の向上、反社会的行動の減少などが特に強い影響を及ぼすということが示唆された。米国では、社会的適応や対人コミュニケーション、感情を高める活動として NPO 団体である Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning (以下 CASEL)が、「社会性と情動の学習」(Social and Emotional Learning : SEL)が提案され、様々な実践が 1990 年代より行われており、それらが心の健康と学業成績に大きな関連性を持つという前提で様々な取り組みがなされている。

2. IB 教育における情動の位置付けとホリスティックアプローチ

一方、生涯学び続ける学習者の養成をミッションとする国際バカロレア教育(International Baccalaureate :以下 IB 教育)では、学びにむかう力(Approaches to Learning:以下 ATL スキル)を認知スキル、情動スキル、メタ認知スキルに分類し、カリキュラムの中に浸透させている。IB 教育は「自己の内的環境と外的環境における、身体的、社会的、倫理的、美学的、精神的な側面を理解し、修正し、享受するために、個人の能力を最大限に育てること」(Peterson 1987)という理念を示しており、それは児童・生徒の認知的な側面のみならず、社会的、情緒的、身体的な発達にも取り組むといった全人的な(ホリスティックな)取り組みであることがわかる。IB 教育では、教師による形成的なフィードバックと生徒による学際的な探究のサイクルが不可欠で、生徒が探究の問いをたて、様々なプロジェクトワークを通し学際的に探究していくことで学びを深めていく。そのプロセスにおいては、深いリフレクションが不可欠であり、特に認知とメタ認知をつなぐ情動スキルの役割が大きく関与(菊地 2021)している。特に情動を育てるにあたり、「感情」と「身体」の関わり、「自分」と「社会」との関わり、「自分」と「世界」の関わりを意識することが重要視される。特に思春期にかかる中学 1 年～高校 1 年生の Middle Years Program (MYP)においては、心身ともに大き

な変化が現れる時期でもあり、その涵養には発達段階を慎重に考慮しなくてはならない。IB の情動スキルにおいては Affective Skill は深い次元のリフレクションによるつながりを意識するものであり、より自らの身体と感情について分析的になることでもある。Social Progress のためでも、社会適応でもない、「自らの感情に気づく」「つながりに気づく」という実践を学校教育において展開していくには、深い次元でのリフレクションを促す教育実践が不可欠である。本発表では、筆者の教育実践における「<いのち>のつながりに目覚める」(ミラー2019)ホリスティックなアプローチについても提示する。

参考文献

- ・荒牧, 美. (2018). 社会情動的スキル : 学びに向かう力 / 経済協力開発機構編著 ; 荒牧美佐子 [ほか] 訳. 東京: 明石書店.
- ・Miller, J. P., Irwin, M., & Nigh, K. (2014). Teaching from the thinking heart: The practice of holistic education. Charlotte, NC: Information Age Publishing, Incorporated.

【研究発表 分科会 1-3】

対話におけるスピリチュアルケア —臨床スピリチュアルケア実践者養成の体験をふまえて—

赤谷 昌美(上智大学大学院実践宗教学研究科)

「ケアされたことのない人はケアできない(ケアされてケアを覚える)」、この考えを基底にした上智大学グリーフケア研究所(Institute of Grief Care, Sophia University=以下 IGT)及び上智大学大学院の臨床スピリチュアルケア師養成プログラムは、「スピリチュアルケア提供者になろうとする者を、スピリチュアルにケアすることを通して養う」という教育理念のもとに実践される。現在、一般社団法人日本スピリチュアルケア学会が認定している、臨床スピリチュアルケア師養成の教育プログラムの一つである。IGT の人材養成は米国のチャプレン養成教育である臨床牧会教育(Clinical Pastoral Education, CPE)をモデルとされたが、日本の社会・文化に適するように独自のプログラムが構築されてきた。養成課程の履修科目としては座学による、死生学、生命倫理、宗教学、心理学、社会学などの学びによって、自己理解、他者理解、関係性と共感力、概念化、臨床倫理実践力を修得していく。臨床実習ではグループワーク・スーパービジョン、対面実習が課せられており、基礎課程においてはグループワーク・スーパービジョンで 60 時間、対面実習で 120 時間、専門課程ではそれぞれ 120 時間、240 時間の単位取得が必要とされる。

臨床実習のグループワークでは成育歴の分かち合い、講話実習、会話記録検討などに取り組み、実際に高齢者施設や緩和病棟を有する病院での対面実習に臨む。この実践的プログラムで参加者同士の関わりによって学んでいくのは、傾聴や対話を軸にした対象者との関わりであるが、相手の中に起こった感情を分析したり、自分の過去の経験に擬えて理解するといった、「人間の内面を論理的に捉える」(村田)というものとは異なる。他者と同じように感じる事が「共感」のではなく、他者と自分との感じ方の差を知ることが「共感」であり、だからこそ、相手が発する言葉に対して内容を解釈するのではなく、それをどのように感じたかを「伝える」ことによって起こる、ケアの現場の「中動態」(国分)的現象を大切にしていく。「ケアしよう、共感しよう、悲しみを分かち合おう」といった目的的な関わりではなく、「ケアがうまくいった、気持ちが通じ合った」といった評価すら求めない、同じ時間と空間を共有する人間どうしの関わりあいによるダイナミズムを体験する。多面的な「分人」(平野)の集合体である人間が発する言葉は自分の使う言葉とは同じ意味を持たない可能性があること、自分が発する言葉は自分の中の整理されていない思いを他人にさらけ出すための手段であることなどを突き付けられながら、「理解し合えない」もどかしさ、「理解したと錯覚する」危うさを重ねながら、時に、介入すらできずに答えの見えない状況にとどまり続ける「ネガティブ・ケイパビリティ」(帚木)のなかにあって、「裁かない、排除しない、相手も私も自分らしくそこにいる」ことによって起こるその場に奏でられる重層的な「ポリフォニー」(バフチン)を味わう特権を得ることで、ケアに関わろうとする心構えを自らの中に確立していく過程を経ていくのである。

シュタイナー音楽療法における聴き手の脳波測定

山下 恭平(東京理科大学)

井藤 元(東京理科大学)

森 彩花(東京理科大学)

筆者らはこれまでにシュタイナー教育における諸実践のうち、フォルメン線描、オイリュトミー、ぬらし絵、楽器演奏における演奏者と聴き手の脳波分析を行ってきた。本研究はこれらに準ずるもので、シュタイナー音楽療法で使用される楽器演奏時の脳波を分析することで、これまで解明されてこなかった音楽療法における諸実践の意義を明らかにすることを目指す。その準備段階として、すでに脳波研究で実績のある簡易脳波計 MUSE を使用し、一般社団法人アウディオパーデにて、長年シュタイナーの理念に基づいた音楽中心の療法および教育活動を行ってきた竹田喜代子氏、勝田恭子氏による演奏を、被験者(健常者)が聴いた際の脳波を測定した。ここで用いられた楽器は、ゴング(青銅、鉄)、タムタム(鉄)、シュテーベ(青銅)のような打楽器で、被験者は耳で聴く音のみならず、体全体でそれらの響きを体験した(開眼、または閉眼状態)。図1は、開眼時の聴き手の脳波を示している。

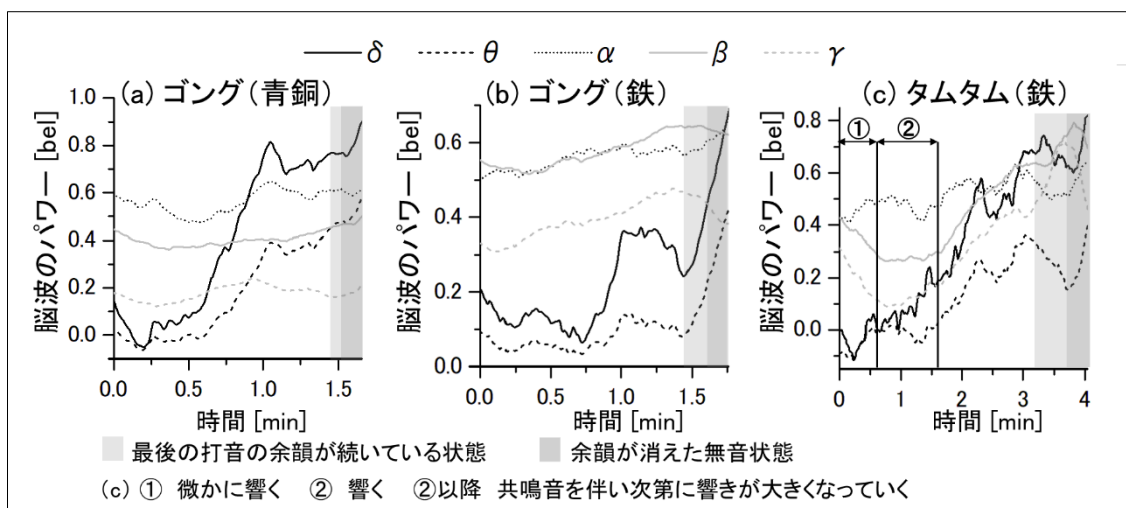


図1. 楽器演奏時における聴き手の脳波(開眼)

本発表では脳波のうち、主として α 波、 β 波、 γ 波に注目し、分析を試みる。各脳波の一般的な特徴として、 α 波は安静時(集中時も含む)や、閉眼時に高くなることが知られている。また、 β 波は積極的に論理的思考活動をしているとき、 γ 波は興奮や注意を要する際に高くなることが知られている。ゴングをマレット(ばち)で打音すると、青銅は柔らかい響きを発するのに対し、鉄は軽やかに響く。被験者によると、青銅の方が落ち着きを感じられたとのことであり、脳波スペクトルからも、青銅の方が安静を示す α 波が優位に高く、緊張感を示す γ 波が低いことがわかる(図1, (a),

(b)。これは、材質として青銅の方が鉄より柔らかいことにも対応している。また、タムタムでは微かな響きの際には、 α 波が上昇し γ 波が低下することから落ち着きが深まるのに対し(図 1, (c) ①)、響きが大きくかつ共鳴音を伴う様になるに従って γ が上昇することから、意識を目覚めさせる効果があることが示唆された(図 1, (c) ②)。さらに、閉眼時の脳波測定の結果から、音の響きは意識的に呼吸に集中するタイプの瞑想よりも、容易に瞑想に入れることがわかった。当日は、音楽療法における音の響きの意義について考察する予定である。

幼児と小学生の参加する持続可能な社会を目指すアートワークショップ

佐藤 牧子(目白大学)

ESD やSDGsという言葉に示されている持続可能な社会の実現を目指す上で、人間と自然、社会の繋がりを大切にするホリスティックなアプローチが重要であることが指摘されてきた。私はアートを通して、地球環境への関心を高めるアートワークショップに関わってきた。本発表では、幼児と小学生と行なっているリサイクル素材を用いたアートワークショップの実践について報告する。ここでいうアートとは自己表現としての絵画だけではなく、多様な素材を使用した造形(工作)を含むものである。

子どもと行うアートワークショップにおいては、子どもがアートを通して、表現すること、<つくる>ことへの欲求を満たすだけでなく、子どもが自発的に動いたその先で、人と繋がり、社会と繋がることによって自分の世界を広げる感覚を育みたいと考えている。自分の世界を広げることは、自分を取り巻く人や社会や自然環境への捉えの変化につながり、自分の力で広げた世界の先にある課題は、個人的な課題であっても社会的課題であっても、自ずと自分ごととして向き合うことになる。素材と向き合いながらイメージを形にしていくアートの活動というのは、ある意味、創造的問題解決学習 (creative problem-solving learning)のプロセスと重なるところがある。

私の行ったアートワークショップでは、ストロー工場や建築の過程で不要になったリサイクル素材を用いるようにしている。参加した子どもたちは、ストローにならなかったプラスチックという素材を前に、イメージーションによってストローとはまったく異なる形を生み出すとことになった。リサイクル素材を使用する意図は、単に環境への配慮ということだけではなく、子どもたちに自由な発想でイメージを広げる契機になると考えるからである。子どもたちのイメージーションの広がりというものが、ホリスティックな教育において重要であることは言うまでもない。本発表においては、アート活動をホリスティックな創造的問題解決学習という視点から考えていきたい。

【実践 1】東京都千代田区の公園において、その場で出会った人々で行った実践(2022.4)



本実践で使用したリサイクル素材は、①建築端材②ストローの製造過程に出た製品にならなかった素材③ペットボトルである。その他(ロープを除く)は、公園にある落ち葉や石を使用して、その場で居合わせた幼児～大人までが参加して、下絵のない状態で対話の中で生み出されたアート作品である。

【実践2】東京都足立区の児童館において、小学生を対象に行った実践(2021.10)



本実践で使用したリサイクル素材は、①廃業した工務店や工場から譲り受けた素材②ストローの製造過程に出た製品にならなかった素材である。その他、ワークショップ用に準備された素材との融合により、子どもたちの手によってアートが生み出される実践である。

坂東流日本舞踊の「稽古」におけるホリスティックな学び
—七代目坂東三津五郎から八代目への芸の伝承を手がかりに—

坂東 光有(坂東流師範/獨協大学外国語教育研究所)

研究背景:文化・文政時代より続く古典舞踊の一派である「坂東流」は、2021年、七代目坂東三津五郎(1882-1961)を家元とする「坂東会」(家元制度)発足から100周年という節目を迎えた。同年、坂東会100年の歩みをまとめた書籍『初心忘れず』が発行されたことで、100周年の基盤を築いた師匠方の芸談(お弟子さんの覚書)や江戸から続く「芸の系譜」が初めて公開された。祖母の代より坂東会に属し、現在4世代で日々の稽古に従事している筆者にとって、「芸の系譜」が可視化されたことは、江戸時代より受け継ぐ芸の系統を自覚する契機となり、また「坂東流」という流派を客観的に掌握する契機ともなった。

本研究では、その内実が外部にほとんど周知されてこなかった坂東流日本舞踊界に着目し、坂東流の「芸の伝承」の在り方を研究対象とする。歴代の家元の中でも、八代目坂東三津五郎(1906-1975)は歌舞伎役者でありながら13冊の文筆を残し、「芸道の開祖世阿弥に対し、八代目は芸道の最後の集大成者である」と讃えられるほど生涯芸道に邁進した人物であった。そこで、筆者は八代目の著作を研究対象に据え、坂東流日本舞踊におけるホリスティックな学びについて考察していく。

「吾以外皆吾師」を座右の銘とする八代目の著作には、七代目による芸の教育方法をはじめ、生涯かけて行う「稽古」の本質やその苦悩が垣間見られ、その根底に流れる精神には、ホリスティック理念との親和性があるように思われた。八代目の遺した文筆をテキスト分析の対象とし、理論面では、西平直氏の近年の著作(『稽古の思想』『ライフサイクルの哲学』)に倣いながら世阿弥の稽古論との関連性を考えていきたい。また、祖母から4世代で坂東流の稽古と関わりをもっている研究主体(筆者)についても、本研究においては、研究者であるとともに研究対象でもあるという側面があるため、より立体的な思考や方法が必要であると思われた。その点については、ライフサイクルやケアとの関わりがあるため、ホリスティックな研究手法や発表の仕方についても、今後の課題としていきたい。

【大会シンポジウム】

教育とケアのあわい ――教育・保育・心理・看護の根底にあるもの――

当学会の研究大会シンポジウムではこれまで、ホリスティック教育/ケアとは何かについて、教育側から、あるいは ESD との関連で、またはいのちや自らを問うことから、探究してきました。今回のシンポジウムでは、教育とケアのあわいをテーマにいたします。一昨年前からの新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、教育のあり方や人とのつながり方の急激な変化をもたらしました。行動制限や体温の変化をモニタリングしながらの生活は、家庭と学校・大学といった場と境目なく続いています。教育の場の社会的福祉的意義も再認識されました。このような中で、みなさま方と教育とケアのあわいをホリスティックに問う機会となりますと幸いです。

大会長 青木 芳恵(帝京大学)

(事前配信) 基調講演 「教育とケアのあわい」

汐見 稔幸(東京大学名誉教授 前日本保育学会会長)

シンポジウム報告者(報告順)

木戸 啓絵(東海大学)

青木 芳恵(帝京大学)

住田 昌治(学校法人湘南学園)

坂井 祐円(仁愛大学)

司 会：成田 喜一郎(前自由学園)

守屋 治代(前東京女子医科大学)

要 旨

○木戸 啓絵(東海大学)

保育は、元来「教育とケア」が分かちがたく一体となった営みである。世界幼児教育・保育機構(OMEP)においても、「Early Childhood Care and Education (ECCE)」という慣用語が一般的に用いられている。本報告では、その保育分野において教育とケアがどのように捉えられてきたか、先行研究をレビューしながら考察する。その際、「つながり・つりあい・つつみこみ」を重視するホリスティックな観点から「教育とケアのあわい」を考えるにあたり、子どもと周囲の人や自然との「関係性」に着目する。最終的には、人間同士のケアだけでなく、地球へのケアについても考察を試みることで、狭義の「教育」を再考したい。

○青木 芳恵(帝京大学)

看護教員として学生の看護学実習に同行するようになって、痛感していることがある。学生にとっても評判がいい看護師は、相手が患者さんでも学生でも、ケアするありようが同じなのである。しかも、学生がその実習の最中、あるいはその後にとっても伸びる。実際、近年、看護教育におけるケアリングのプラクシス(実践)を提唱する看護教育者が少なくない。一方で、学生が看護の専門職として他者に安全に関わるようになるには、一定以上の知識・技術・態度に、一定期間内に到達することが求められるため、「教える」側はジレンマを抱えやすい。今回、「Nursing」「看護」「教育」「care」の語源や由来に立ち返りながら、看護における教育とケアのあわいを皆様と共有し、問い直す機会としたい。

○住田 昌治(学校法人湘南学園)

「ケアで育み、学校を元気にする ESD」

児童生徒も教職員も一人一人を尊重し、それぞれの意見にしっかりと耳を傾けて、自分と違う意見であってもその意見を受け止め、必要があればお互いにサポートし合い、支え合っていけるような関係性を育むことで、学校が安心して過ごせる場になります。お互いに気にかけて合い、声をかけ合い、受け入れてもらえる環境の中で、それぞれの人が安心して過ごせる場があるからこそ、自分らしさを存分に発揮し、お仕着せではなく自分の選択を大切に、日々挑戦することができる元気な学校になるのです。

○坂井 祐円(仁愛大学)

これまで心理カウンセリングに関わってきました。カウンセリングは「聴く」ことを大事にします。「聴く」ためには相手に共感することが前提となります。ところが、これは簡単ではありません。相手のことを「わかる」必要があるからです。相手を深いところから「わかる」と、心の奥底がゆきぶられます。それは相手の心に「ふれる」という濃密な時間でもあります。このとき、おそらく相手もまた濃密な時間を経験していると思います。ただし、相手の心に「ふれる」ときは、いつも優しい時間であるとは限りません。苦しい時間にもなりうるのです。だからこそ、カウンセリングは、教育とケアのあわりと言えるのではないかと思うのです。